

## 2022 年 沖縄本土復帰50 年 平和行進を終えて

東京支部 ニチウン分会 渡部 昌彦

### 1)2022 年5 月12 日 平和学習会

講師古謝氏の話聞く中で、戦後から今日の77 年間の苦労や想いを聞き、私がこれまで考えた事のない事実があった。沖縄も戦時中はお国の為をスローガンに皆一生懸命戦争と向き合っていたと考える。その頑張りが報われず、敗戦後27 年間は米国の統治下におかれ、マグロはえ縄漁船の被ばくに端を発し、本土での反対運動からその基地が沖縄に増設され、住み慣れた土地を追いやられ、度々起こる米軍人の暴力、常に危険との隣り合わせの状況に非常に悔しい思いをした人が多かったと考える。

やっとの思いで日本に返還されたのが50 年前、その時沖縄中の家々日本国旗が掲げられ、講師古謝氏はその時初めて日本国旗を観たと話されていた。皆日本に復帰したその日は本当に嬉しかっただろう。にも拘わらず、沖縄国民の復帰への想いは今日までずっと裏切られてきた。基地は縮小されず、未だ日本に点在する基地のその殆どが沖縄にあり、米国に対する憤りに加え、沖縄にばかり負担をかけている日本政府をもう信じられなくなっていると感じた。復帰した時に掲げた日本国旗、今では国旗を飾る家はない。

### 2)2022 年5 月13 日 ひめゆり資料館と旧海軍司令部壕

自分の子供の年齢の女学生も戦争の犠牲になっていた事に改めて驚いた。

本来であれば、仲間同士で色々な遊びをし、勉強をし、恋などもしていたかっただろう。学徒動員と称し、沖縄に米兵上陸後、日本兵の看護に従事し、その多くが亡くなった。その数136 人、若くこれから未来ある少女が何人も無くなった事がやるせない。日本兵に献身的尽くし、自分の置かれている状況に疑問を持つ暇もなく、毎夜毎晩米軍の攻撃におびえ、ガマの中で一生懸命生きていた彼女達。いよいよ戦況が悪くなり、逃げる際にその命が米兵の銃弾に倒れたのだ。こんな事今後絶対あってはならない。

これからの日本の若い子に同じような経験をさせてはいけない。

彼女たちもだが、当時の日本兵の様子を旧海軍司令部壕を見学し、地下にすごい数の部屋があり、天候のせいもあっただろうが、湿気が多く、正直今の自分の暮らしと比較した。あのような環境下で戦況に注視し、日本の為に頑張っていたのだと思うとそれはそれで、感謝しかない。下士官室は十帖ほどの広さで、下士官たちは立って睡眠をしていたようで、非常に苦労された事が想像出来る。司令官室に近い部屋には幕僚が手榴弾で自決した

時の破片の跡がくっきりと残っていた。手榴弾で自決する、こういった想いでピンを抜いたのか。

ただただ、悲しい空間であった。

### 3)2022 年5 月14 日-15 日 平和行進、県民大会、辺野古基地建設風景

平和行進をする中で年配の方が皆手を振って応援してくれた。やはり年配の人ほど、基地に対する嫌な想いが大きいのだろうと考えた。行進中、普天間基地、嘉手納基地を横目に行進したが、この土地がもっと経済的な用途に利用されれば、沖縄の方々の暮らしも充実するだろうと、苦々しい気持ちが湧いてきた。

辺野古基地の建設が進展する中、対岸の砂浜から見学した。綺麗な砂浜で、家族が楽しそうに海水浴を楽しんでいる風景が浮かんでくるが、その先に目をやると、基地の為に埋め立てが進んでおり、違和感しかなかった。こんな素敵に海に基地なんていないと考えた。

### 4)総括

沖縄は島国日本のさらに島国であるが、沖縄の基地問題は我々日本国民が皆で考えないといけない問題である。この数十年解決できなかった問題を私が生きているうちに解決できるかどうかかわからないが、解決できるよう、今後も継続し、自分なりにこの問題に取り組みたいと考える。

『命どう宝』をスローガンに。

以上